

小学校 特別活動部会

部会長名 福智町立伊方小学校 校長 相緒 英樹

実践者名 福智町立金田義務教育学校 教諭 石松 由里恵

1 研究主題

◎他者と協力して、楽しく豊かな学級をつくる学級活動(1)◎

～▽様々な意見を比較・検討するよりよい合意形成を通して▽～

2 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

5年後、日本の未来はどのように変容していくのか文部科学省「2030年の社会と子供たちの未来」では以下のように記されている。2030年には、少子高齢化が更に進行し、65歳以上の割合は総人口の3割に達する一方、生産年齢人口は約58%にまで減少すると見込まれている。同年には、世界のGDPに占める日本の割合は大きく低下するとの予測もあり、日本の国際的な存在感の低下も懸念されている。また、グローバル化は社会に多様性をもたらし、急速な情報化や技術革新は人間生活を質的にも変化させつつある。こうした社会的変化の影響が、身近な生活も含め社会のあらゆる領域に及んでいる中で、特別活動の充実は、予測困難なこれからの時代を生きる子供たちに必要な資質・能力を育むことが期待される。

このような時代にあって、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。

(2) 本校また本学級の実態から

在籍校は、通常の学級在籍児童数377名、特別支援学級在籍児童数44名、計421名からなる。本校の児童は明るく活発で、学校生活に活気をもたらしている。一方で、集団生活に必要な規範意識が十分に育っていない児童も多く、落ち着きのなさが課題となっている。こうした状況は、他者の意見を受け止めて合意形成する力の未成熟さとして表れている。本実践で紹介する6年生も同様な課題がみられる。

本学級は、児童数28名からなる。本学級について、4月当初の担任による観察の記録や、前担任・生徒指導委員会からの報告から分かる学級の様子は、児童同士の衝突や言い争いが頻繁に見られ、互いの気持ちを尊重し合う姿勢が十分に育っているとは言い難い様子であった。また、学習場面においても、教師や友達の話最後まで聞くことが難しく、話の途中で発言したり、私語が絶えなかったりする様子が見受けられた。人間関係においては、特定の友人とだけ関わる傾向が強く、グループが固定化されており、学級全体としての一体感や協調性に欠ける印象があった。

このような課題を解決するためには、子供たちが楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるために、問題を発見し、解決方法について多様な意見のよさを生かして合意形成を図り、信頼し支え合って実践していくことが重要になる。そのために、学級活動(1)の活動の各場面にお

いて、児童が多様な意見に触れながら、よりよい合意を目指して対話を重ねる経験を積むことが必要であると考え。また、意見を比較・検討し、納得解を見いだす合意形成の力は、単に話し合いの技術にとどまらず、他者と協力して楽しく豊かな学級を築いていくための土台となるものであると考える。

3 主題・副主題の意味

(1) 他者と協力して、楽しく豊かな学級をつくる学級活動(1)とは

学級活動(1)の内容において、「他者と協力して、楽しく豊かな学級をつくる学級活動(1)」とは、児童が学級の一員としての自覚をもち、仲間と関わりながらよりよい学級を築いていくための実践的な取組である。学習指導要領では、学級活動(1)のねらいとして「よりよい人間関係の形成」が示されており、児童が互いを理解し、協力し合う中で、安心して生活できる学級づくりを進めることが求められている。

具体的には、係活動や当番活動、学級会、行事の準備やふり返り、日常生活のルールづくりなど、児童が自分たちの生活をよりよくするために取り組む活動が中心となる。これらの活動を通して、児童は自分の役割を果たすことの大切さや、仲間と協力することの喜びを実感しながら、責任感や思いやりの心を育てていく。

また、活動の中で他者と関わる経験を重ねることで、児童は自分とは異なる考え方や感じ方に気づき、相手を尊重する態度を身につけていく。こうした経験は、学級という小さな社会の中で、児童が安心して自分らしく過ごし、互いに支え合いながら成長していくための土台となる。

このように、他者と協力して、楽しく豊かな学級をつくる学級活動(1)は、児童が仲間と協力しながら学級を築いていく過程を通して、よりよい人間関係と充実した学校生活を実現していくための大変価値のある取組であると考え。

(2) 様々な意見を比較・検討するよりよい合意形成とは

① 様々な意見を比較・検討する話し合いとは

「様々な意見を比較・検討する話し合い」とは、児童が自分の考えをもつだけでなく、仲間の多様な意見や立場に耳を傾け、それぞれのよさや課題を見つめながら、よりよい考えや方法を見いだしていく過程である。学習指導要領に記されているように、話し合い活動を通して「多様な意見を尊重し、よりよい人間関係を築くこと」や「集団の一員としての自覚をもち、よりよい生活や人間関係を築こうとする態度を育てること」が重視されており、このような話し合いはその実現に向けた重要な手立てとなると考える。

このような話し合いでは、単に自分の意見を主張するだけでなく、他者の考えと自分の考えを比べたり、違いを認めたりしながら、よりよい方向を探っていく姿勢が求められる。児童はその過程で、相手の立場に立って考える力や、柔軟に考えを広げる力を身につけていく。また、こうした話し合いを繰り返すことで、児童は「みんなで作る」ことの意味や楽しさを実感し、学級の一員としての責任感や協働する力を育てていく。話し合いは、学級という集団の中で自分の思いを伝え、他者とつながりながら生活をよりよくしていくための、かけがえのない学びの場である。

② よりよい合意形成とは

「よりよい合意形成」とは、児童が自分の考えをもつとともに、仲間の多様な意見や立場に耳を傾け、それぞれの意見のよさや課題を比較・検討しながら、学級全体にとって最も望ましい結論を導き出す過程である。学習指導要領特別活動編では、話し合い活動を通して「多様な意見を尊重し、よりよい人間関係を築くこと」や「集団の一員としての自覚をもち、よりよい生活や人間関係を築こうとする態度を育てること」の重要性が記されている。合意形成はその中心的な学びの一つとされている。このような合意形成の過程では、意見の違いを否定するのではなく、互いの考えを認め合いながら、よりよい方法や考えを見いだそうとする姿勢が求められる。児童は其中で、他者と協力して課題を解決する力や、集団の中で自分の役割を果たす責任感、そして自分たちの手で学級をつくっていくという主体的な態度を育てていく。

「よりよい合意形成」は、単なる多数決による決定ではなく、全員が納得し、共に進んでいける道を探る営みであり、児童が安心して意見を出し合い、互いに学び合う学級づくりの土台となるものである。

以上(1)、(2)を踏まえ、本研究において目指す子供像を以下のように考える。

知識・技能	よりよい集団づくりの在り方を理解し、目標に向かって自らの役割を遂行するとともに、仲間と力を合わせて活動に取り組むことができる。
思考力、判断力、表現力	共通の目標に向かって、より適切な手立てを模索し、自分の意見を伝えながら、新たな方策を創り出すことができる。
学びに向かう力、人間性等	共通の目標に向かう意欲をもち、自ら他者に自分の思いを伝えたり、よりよい集団をつくろうと自ら他者に関わったりすることができる。

4 研究の目標

学級活動(1)において様々な意見を比較・検討するよりよい合意形成を充実させるには、子ども達がよりよい合意形成に向かうための支援や教師の手立てや工夫が大切であると考えられる。特に、児童が多様な意見を比較・検討しながら、学級全体にとって望ましい結論を導き出すためには、どのような話し合いの進め方や支援が効果的であるのかを探る必要がある。そのために、児童が安心して意見を出し合える雰囲気づくりや、他者の考えを尊重しながら自分の意見を伝える力の育成、話し合いの目的や手順の明確化といった要素に着目し、実際の学級活動を通してその効果や課題を検証していく。児童が話し合いを通して「楽しく豊かな学級を自分たちでつくる」という意識を高め、主体的に学級づくりに関わる姿を育てるためには、どのような合意形成の在り方が必要なのかを究明する。

5 研究仮説

学級活動(1)における「よりよい合意形成」を重視し、多様な意見を比較・検討しながら全員が納得できる結論を導く経験を積むことで、互いを尊重し協力し合う姿が育まれる。こうした積み重ねが、楽しく豊かな学級づくりへとつながっていくだろう。

6 研究の計画

- (1) 議題 「前期課程、最上級生として後輩に残そうプロジェクト」
- (2) 議題が決定するまでの経過 (議題設定の理由を含む)

6年生になった子どもたちは、学級会で話し合いを重ね、「進んで学び自分で考え、得意なことを生かせるクラス」「友達思いで支え合えるクラス」「失敗を恐れず何事にも挑戦するクラス」という学級目標を決定した。子どもたちは、この目標の実現に向けて協力しながら、学級会や学級活動に取り組んできた。

当初は、友達の意見を十分に聞かず、自分の考えばかりを一方向的に述べてしまう児童も多く、発言の仕方にも身についていなかったため、円滑な話し合いが難しい状況であった。しかし、繰り返し話し合いの場を設け、「よりよい合意形成とは何か」を共に考えていく中で、次第に相手の意見を受け止めながら話し合う姿が見られるようになった。その結果、進級当初と比べて人間関係も少しずつ改善し、互いを認め合う雰囲気が育っていった。

さらに二学期の終わりには、「学校のために何かできないか」という児童の声をきっかけに、前期課程の最上級生として後輩に残せるものを、自分たちの手で企画・立案する活動へと発展した。

本時の学級会「前期課程・最上級生として後輩に残そうプロジェクト」は、運動会が終わり、前期課程での生活も残りわずかとなった時期に計画された議題である。運動会では一人ひとりが役割をもち、その役割を責任をもって取り組むことでリーダーシップを発揮し、意義ある活動ができた。運動会を終え、次の目標をどうするか学級の話題にあがっていた。そんな中、「今までお世話になった人や下級生に向けて何かを残したい。」というF児の思いをきっかけとして「前期課程、最上級生として後輩に残そうプロジェクト」を議題として設定した。本議題を通して、6年生としてがんばってきたことを踏まえ、後輩に何かを残すために、自分たちにできることは何かについて学級全体で話し合い、伝統をつなぐための話し合い活動を通して前期課程最上級生としての意義を見出すことができる。

- (3) 児童の実態

本学級の児童は、明るく活発で、学級をよりよくするための意見をはっきり述べることができる子が多い。一方で、上級生として学校をよりよくしようとする意識には個人差があり、自分たちが学校の中心的役割であるという自覚を十分にもてない児童もいる。学級における生活や児童会活動の常時活動ではリーダーとして責任をもって行動する姿が見られるものの、よりよい生活づくりのために、他者と協力して動いたり、進んで実行したりすることには課題も見られる。

学級活動では、自分たちの生活を振り返り、生活上の諸問題を自発的に話し合ったり、解決したりすることができるようになってきた。しかし、多様な意見を生かしながら合意形成したり、話し合いの視点を学年や学校単位に広げたりして話し合うには至っていない。

そこで、後期課程進級への実感が徐々に高まってきたこの時期に、学級生活の充実と向上を目指しながらも、視点を学校全体に広げ、受け継いできた金田義務教育学校前期課程の伝統を残すための話し合いを行うことで、学校のために活動することの楽しさや成就感、達成感を高めることができるようにする。

(4) 指導にあたって

① 事前

本学級会の議題は、F 児の「今までお世話になった学校や下級生に向けて何かを残したい。」という発言をきっかけに、学級全体で話し合いを重ねる中で生まれたものである。前期課程最上級生として学校の伝統を守り、さらに下級生へと伝えていくことを目的とした「前期課程、最上級生として後輩に残そうプロジェクト」としてテーマを設定した。

次に計画委員会を開き、話し合うことや活動計画について整理した。その中でプロジェクトへの意欲をもつことができるように、下級生に何を残すかを話し合うことにした。柱を一つにした理由として、子ども達は意欲的に意見を出す一方で、複数のテーマを同時に扱うと整理が難しく、結論までたどり着けない傾向が見られる。そこで、学級会では一つの柱に絞り、話題を焦点化しじっくりと話し合う時間を確保することで、子ども達が集中して意見を深め合い、具体的な行動計画へとつなげられるようにした。

また学級会の準備として、「議題」「提案理由」「話し合いの柱」を学級会コーナーに掲示したり事前に学級会ノートに考えを書くようにしたりして、課題に対して意欲を高められるようにした。

② 本時

本時の学級会の話し合いの柱は「下級生に何を残すか。」について話し合う。合意形成していくための観点は提案理由に則することは前提として、学校の抱える課題の改善にふさわしいもの、また後輩たちやお世話になった方が笑顔になる取組になるものとして話し合いを進めていく。

なお、学級会の前日に学級会ノートを配布しておき、柱について自分の考えをつくらせておく。そして学級会が始まる前に、自分の考えを黒板に書かせておき、意見を比べる所から始めることで提案理由に則したよりよい考えができるように取り組む。一人一人の思いや願いを意見として出し合い、互いの意見の違いや多様な考えがあることを大切にしながら意見を述べ合うことで、合意形成を図ることができるようにする。また、「比べる」段階では、賛成・反対意見を色違いのマグネットで表したり、ICT 機器を活用したりすることで、板書の構造化を図るようにする。

③ 事後

話し合いで決まったことを基に、役割分担を行い実践していく。そして、みんなで話し合い決定したことを実践することに喜びを感じ、みんなが協力して活動できるようにする。その際に、学校を思う気持ちを忘れずにそれぞれが自分の役割に責任をもって活動できるようにする。また、活動後に振り返りを行い賞賛することで、学級会で決まったことを実践し成功させることの喜びを実感させ、自己有用感を向上させるようにする。残りの学校生活をよりよいものにしようとする意識を高めるようにする。

(5) 育成を目指す資質・能力

- 協力して豊かな学級や学校生活をつくることのよさや、互いの意見を認め合いながら折り合いをつける話し合いの仕方を理解することができるようになる。

(よりよい生活を築くための知識及び技能)

- 相手の立場を考慮して発言したり、友達の思いを受け止めて聞いたりし、多様な意見のよさを生かしながら合意形成を図ることができ、決まったことを実践することができるようになる。

(集団や社会の形成者としての思考力、判断力、表現力等)

- 学級や学校生活での議題に関心をもち、互いに信頼し合える人間関係を形成するとともに自分の役割や自他のよさを考えながら実践の活動に取り組むことができるようになる。

(主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度)

(6) 評価規準

よりよい生活を築くための知識及び技能	集団や社会の形成者としての思考力、判断力、表現力等	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度
互いに協力して豊かな学級や学校の生活づくりをすることのよさや、みんなの意見をもとにして折り合いをつける話合いの仕方を理解しようとしている。	学級や学校の課題を見だし、相手の立場を考慮して発言したり、友達の思いを受け止めて聞いたりして、多様な意見のよさを生かしながら合意形成し、決まったことを実践しようとしている。	金田義務教育学校に学級の思いを残したいという意欲をもち、見通しをもったり振り返ったりしながら、自己のよさを発揮し、役割や責任を果たして集団活動に取り組もうとしている。

(7) 指導計画

	児童の活動	指導上の留意点	日時
事前の活動	① 議題カードをもとに、議題を設定する。	○ 議題選定の視点、提案理由の意義を理解して選定できるようにする。 ○ 司会グループの人たちが中心になって議題を決定する。	11月5日(水) 昼休み
	② 選定結果を報告し、議題を決定する。	○ 何について話合いを進めていくのかを考え、話合いの柱を立てる。 ○ 事前に学級会ノートに自分の考えた活動内容を書き、理由を考えてくるようにする。	11月14日(金) 昼休み
	③ 学級会の準備をする。	○ 提案理由や話し合う内容を練り上げる。皆が納得できる提案理由になるよう提案者に指導助言を行う。 ○ 司会グループと話し合う場を設定し、学級会で話し合う内容をまとめる。 ○ 学級活動の時間内に話合いが終わるように絞り込みを行わせる。 ○ 役割を確認させ、自信をもって仕事ができるようにする。 ○ 話合い活動での発言の仕方や、聞き	11月17日(月) 朝の会 11月18日(火) 昼休み

		方、賛成や反対の意見の出し方を確認する。	
本時	学級会 議題「前期課程、最上級生として後輩に残そうプロジェクト」	<ul style="list-style-type: none"> ○ 出された意見を賛成意見と反対意見に分別して、板書することができるように、色分けの確認をする。 ○ 話合いの目的がそれないように提案理由やめあて、話合いの柱を確認するように助言する。 ○ 話合い活動での全体の様子やよさを認め、発言のよかったところを評価する。 	11月26日(水) 5時間目
事後の活動	<ul style="list-style-type: none"> ① 「前期課程、最上級生として後輩に残そうプロジェクト」の準備をする。 ② 「前期課程、最上級生として後輩に残そうプロジェクト」を実施する。 ③ 活動の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 話合いで決まったことを確認して、決まった取組内容ごとに役割分担する場を設定する。 ○ 話合いで決まったことを確認して活動のはじめにめあての確認をする。 ○ 活動の振り返りを行い、全体で共有する場を設定する。 	12月頃実施予定

(8) 本時

① 本時のねらい

①学校のためになるもの、②お世話になった人や下学年児童が笑顔になるという視点を明確にし、相手の立場を考えて提案理由に沿った意見を発表したり、友だちの思いのよさを受け入れ、互いの意見を比較したりしながら創意工夫を生かして合意形成できるようにする。

② 授業仮設

以下の手立てを講じれば、提案理由を元に合意形成し、学級総意で決定できるであろう。

- スムーズに話合いを進めるために、進め方のシナリオや進行表を活用する。また、話合いのルールを守って意見を出し合うようにする。
- 視覚的に分かりやすく意見を比べられるように、黒板やタブレットを活用して、出された意見を共通点や相違点に分類し整理する。意見の論点がずれないように、意見を比べるまとめる際の視点を明確にする。
- 司会グループには、事前に役割分担の大切さを伝えておくことで、達成感や話合い活動への意欲をより高めることができるようにする。

③ 本時活動展開計画

本時の活動展開計画	
議題	「前期課程、最上級生として後輩に残そうプロジェクト」
提案理由	「前期課程での生活も残りわずかとなりました。後期課程へ進学する

<p>話し合いのめあて</p> <p>話し合いの柱</p>	<p>ことへの意識も高まってきています。しかし、前期課程最上級生として学級や学校をよりよくしようという意識はまだまだ足りません。そこで今までお世話になった方々や下級生が笑顔になるような、また学校がよりよくなるようなものを何か残せないかと考え、提案しました。」</p> <p>話：話し合いの目的を意識して、自分の考えをはっきりと分かりやすく伝えよう。</p> <p>聞：話している人の気持ちや考えを大切にして聞き取り、相手の話をしっかり受け止めよう。</p> <p>① 下級生に何を残すか。</p>
<p>主な活動内容</p>	<p>教師の指導・援助と本時の留意点</p>
<p>1 はじめの言葉</p> <p>2 合い言葉確認</p> <p>3 役割の紹介</p> <p>4 議題、提案理由</p> <p>5 めあての確認</p> <p>6 話し合いの順序</p> <p>7 話し合い</p> <p>柱①：下級生に何を残すか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学級会開始を意識させるために、大きな声ではっきり進行できるように助言する。 ・学級会の雰囲気を明るく楽しいものにするため、学級で決めた学級会の合い言葉の言い方を議長に指導する。 ・議長団とフロアが互いの立場を尊重しながら話し合いができるように、気持ちを込めて「よろしくお願いします。」を言うように指導する。 ・話し合うことを明確にするために、議題の確認を行う。 ・提案理由を意識した話し合いができるように助言する。提案理由から話し合いの方向性となるキーワード(言葉)を分かりやすく提示する。 ・充実した話し合いができるようにするために、「話す側のめあて」と「聞く側のめあて」を確認するように指導する。 ・学級会の活動に見通しをもつことができるように、話し合いの手順を確認するよう指導する。 ・議長が対応できない状況や教師の判断が必要な状況では適宜指導助言を行う。 ・円滑に話し合いの進行ができるように、意見をあらかじめ板書し、意見の比べ合いから話し合いを進めるように指導する。 ・意見の論点がずれないように、意見を比べる、まとめる際の観点を明確にし、周知徹底することを指導する。 ・学級への所属感や連帯感を感じ取らせるように、ペアや小集団での話し合いを適宜取り入れ、発言が苦手な児童の考えも取り入れる。 ・話し合いの柱から逸れることなく焦点化した話し合いがで

8 決まったことの確認	<p>きるようにする。反対は賛成の否定ではないという認識で、できる限り出された意見のよいところを合わせてまとめていくように指導する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの時間配分に注意して、必要に応じて副議長にタイマーで時間を確認するように助言する。 ・議長や副議長がどんな意見にも対応できるように、事前に予想される意見への反応を指導しておく。 ・出された意見を整理し、ノート書記が全体に決まったことの確認を行うように指導する。
9 話し合いの振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合い活動でよかったところや、今後の見通しがもてるような意見が書けるように助言する。
10 先生の話	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合い活動の様子や司会グループの進行のよさ、前回の話し合いと比較してよくなった点を評価し、次の活動への意欲を高めることができるようにする。
11 議長からの評価	<ul style="list-style-type: none"> ・友達同士で認め合うよさを感じ取らせるために、議長による学級会の総合的な評価を行うように指導する。
12 終わりの言葉	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の議題を経て、話し合いの良さやプロジェクトに向けて、頑張っていこうと思えるような言葉を添えて、終わりの言葉を使う場を設定する。

※ 上記のように、ねらいにかかわる視点を持ち、**児童**が多様な意見を比較・検討しやすい環境を整え、よりよい合意形成に繋がるように指導していく。

「出し合う」→「比べ合う」→「まとめる」のそれぞれの段階において特に「比べ合う」と「まとめる」の段階への支援や手立てを重視して行っていく。「比べ合う」では、意見の共通点・相違点を整理しよりよい案を検討する。意見をグループ化し、メリットやデメリットを整理して板書していく。また、合意形成のプロセスのパターンや司会の進め方を明らかにしておく。他者の意見をよく聞き、意見を繋げて発言していくための手立ても行っていく。そして「まとめる」段階に向けて児童の思考の流れを生かして創意工夫しながら、合意形成を目指していく。教師は、学級全員に問いかけることも必要であり、司会グループに指導したりしながらよりよい合意形成に向けて支援していく。

7 指導の実際

教師の働きかけ	児童の反応
<p>① 問題の発見</p> <p>児童から問題を集める場合、議題ポストをICTで作成し児童から学級会の議題を集めていく。高学年ということもあり、この議題ボックスの運営を児童に委ね、教師主体から児童主体へと少しずつ変更していく。</p>	<p>ICTを活用して議題ボックスを設置したことで、児童は思いついた課題を気軽に投稿できるようになり、これまで学級会の議題づくりに消極的だった児童も自分の考えを積極的に提出する姿が見られるようになった。また、投稿された議題が一覧で共有されることで、児童は</p>

	<p>他者の視点や問題意識に触れ、「こういう考え方もあるのか」と新たな気づきを得るようになった。</p>
<p>② 計画委員会の役割分担</p> <p>他者と協力しながらよりよい生活をつくっていかうとする態度を養うために、責任をもって自身の役割を務めることは元より、全体の状況を見ながら、全員で協力しながら進めることを意識させる。</p>	<p>児童は自分に任された仕事を「自分が責任をもってやり遂げるべきこと」と捉え、期限を意識しながら準備を進める姿が見られるようになった。また、活動が進むにつれて、計画委員の児童は「今どこが進んでいて、どこが遅れているのか」を自然と確認し、必要に応じて他の担当に声をかけたり、「ここは手伝おうか」と自ら動いたりするなど、全体を見渡して行動する姿が増えていった。</p>
<p>③ 活動計画の作成</p> <p>自主的・実践的に活動できるようにするため、児童に活動の見通しをもたせる活動計画を作成する。計画の詳細は以下の通りである。</p> <p>ア 議題を話し合いの当日までにどのようにお知らせするか考える。</p> <p>イ 提案理由について提案者と「なぜ話し合うのか。」について明確にしておく。</p> <p>話し合いのめあてを学級の実態に合わせて決める。</p> <p>ウ 決まっていることの確認を行う。</p> <p>エ 学級会のプログラムをクラス全員に配付する。</p> <p>オ 準備物を用意し、掲示物を作成するなど活動計画を作成しておく。</p>	<p>活動計画を作成することで、フロア側の児童は、活動の見通しをもち、学級会の目的を意識しながら自らの考えを整理してくる姿が見られるようになった。また、議題に関連する資料を自主的に収集し、話し合いに必要な情報を主体的に準備する児童も確認された。さらに、掲示物の作成や準備物の整理においては、担当の枠を超えて互いに協力し合う姿が増加し、学級全体で活動を支え合おうとする協働的な雰囲気形成されていった。</p>
<p>④ 提案理由への意識化</p> <p>少数意見の考えや多様な意見をまとめ、合意形成を図るために提案理由の明確化と意識化を行う。そのために、議題カードに、提案理由を書く欄を設け、児童の思いや願いを共有する。また、提案理由を意識して司会進行を行うように計画委員会に指導しておく。</p>	<p>これまでの学級会では、論点が逸れたり、個々の意見が散在したりする場面が多かったが、提案理由を意識化したことで、児童は「なぜこの議題を話し合うのか」という目的を踏まえて発言するようになった。また、提案理由を基点に議論を進めることで、話し合いの焦点が明確になり、合意形成に向けて全体で論点を共有しながら議論を深めようとする態度が見られるようになった。</p>

<p>⑤ 合意形成に向けての支援・指導</p> <p>児童の力で合意形成に向かって学級会を進められるようにその手順や方法を徹底する。具体的には意見を可視化する環境を整えたり、話し合いの基準(実現可能性や当該学年にとってふさわしいか等)を共有したりする。また、収束のパターンを児童に示す。平場の児童の理由を述べる力を育てる。教師が「話し合いの見通し」を明確にするため、(出し合う→比べ合う→まとめる)で、どの段階で何をするのか示す。友だちの意見に対して、自分の考えを伝え、より納得できる解決法を見出すためにつなぎ言葉の使い方の具体を示し可視化する。</p>	<p>当初は自分の意見ばかりに意識が向き、他者の発言を十分に聞こうとしなかった児童であったが、話し合いの手順や基準、つなぎ言葉の活用が明確になったことで、まず相手の意見を丁寧に聞き取ろうとする姿勢が見られるようになった。また、提案理由や話し合いの段階を意識しながら発言する児童が増え、少数意見の背景にある思いや理由にも目を向けながら折り合いをつけようとする態度が育っていった。結果として、互いの意見を関連づけながら議論を深め、合意形成に向けて協働しようとする姿が学級全体に広がった。</p>
<p>⑥ 学級会で決まったことの実践</p> <p>決定事項を円滑に実行できるよう、役割分担表や取組進行表の作成し、児童一人一人の役割を明確化する。また、児童が自らの役割を主体的に遂行し、互いの特性を生かして協働できるよう、適切な助言や環境調整を行い、計画の実効性を高める支援を行う。</p>	<p>児童は、自分たちのクラスの実態を踏まえて決定事項の実行方法を話し合い、主体的に行動へ移す姿が見られた。また、役割を果たしながら互いに協力して取り組む中で、活動が形になっていくことへの達成感をもって実践に向かう姿が見られた。</p>
<p>⑦ 振り返り</p> <p>学級会で決定した内容の実践後、児童が成果と課題を即時に把握できるよう、振り返りシートの記入を行う。また、児童の記述や発言を基に達成状況や課題点を可視化し、学級全体で共有する機会を設けることで、児童が自己の成長を実感し、次の課題解決に向けた見通しをもてるよう支援する。こうした即時的な評価活動を通して、実践の継続や新たな課題の発見へとつなげていく。</p>	<p>振り返りシートの記入や達成状況の可視化を繰り返す中で、児童は自分たちの実践を客観的に捉えられるようになり、「できたこと」と「改善すべきこと」を自ら言語化する姿が増えていった。また、学級全体で共有する場を通して、他の児童の気づきや努力にも目を向けるようになり、自分の成長を実感しながら次の課題に向けて意欲的に取り組む様子が見られた。</p>

【写真1】ICTを使った意見の可視化

記録カード

記録カードを思い出す 改善点やいいところ分かる

作ると見てわかる テキストの色を変える

気持ちがいい

仲を深める会

傷つかないから

ちゃんと名前で呼んでくれるから

言葉が良くなる

悪口を言った人に注意する

トラブルになる

喧嘩になるから

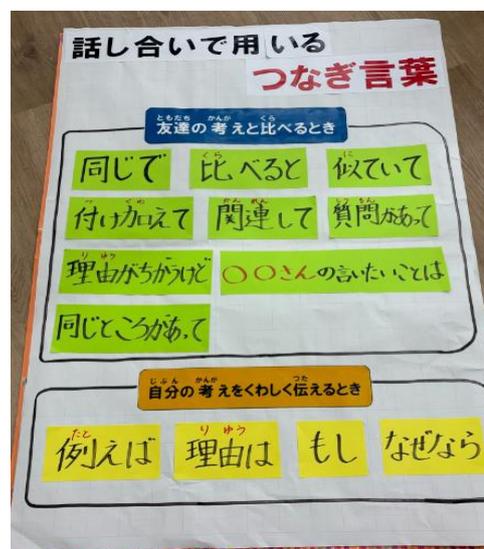
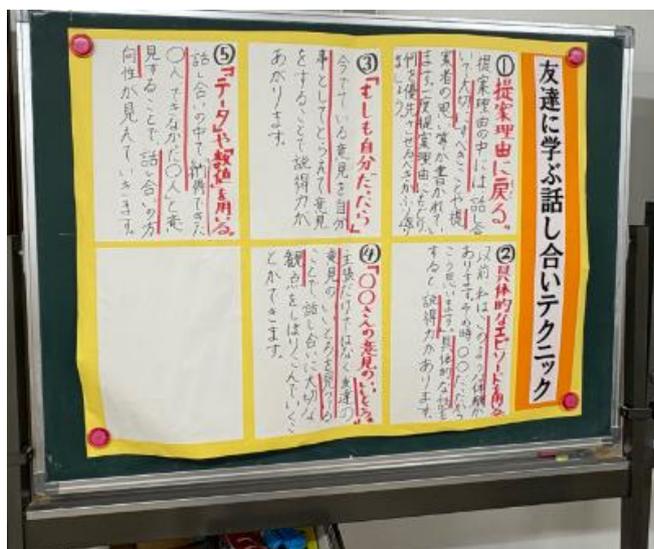
新しい喧嘩が生まれるから

あいさつ	掃除	給食	読書	他学年との交流会
あいさつをしたら相手も笑顔になるから	周りをきつかった行動ができる	みんなと食べたらおいしくたべられるから	本を読む人が少ないから	他学年に思いやりが伝えられる
あいさつをしたら友情が深まるから	学校がきれいになって気持ちよくなる	楽しいだけじゃ意味がない	本を読むのが好きになるから	ゲームで仲良くなれるから
学校が明るくなる	スムーズに掃除ができるから	思いやりを残せない	学校自体よくなる	一人でも多く名前を覚えられるから
学校がよりよくなるから	気持ちよく過ごせる	掃除を通して他学年とも交流できる	スタンプラリーをすればよい	いい思い出もなるし思いやりももてるから
一日が楽しく始められるから	挨拶をすすと気持ちよくなる		学校がより良くなるような本を作る	思いやりが伝わる会を開く
			学級を回って本を読む	後はいに思いやりが残せられる

【写真2】本時の板書



【写真3】合意形成に向けたテクニック・つなぎ言葉を掲示



8 研究のまとめ

本研究では、楽しく豊かな学級をつくるためには、児童が多様な意見を出し合い、それらを比較・検討しながらよりよい合意形成を目指す話し合い活動を積み重ねていく必要があることを考察してきた。授業を通して、教師が合意形成を図る話し合いの流れを明確に示すこと、司会や記録などの役割を重点的に指導すること、そして合意形成のプロセスを児童自身が体験する機会を保障することの重要性が明らかになった。特に、意見の可視化や分類、理由の共有といった手立てを取り入れることで、児童は自他の意見を客観的に捉え、学級全体として納得度の高い結論を導く姿が見られた。

文部科学省は、特別活動において「話し合いを通して課題を見だし、解決に向けて協力する力を育成すること」を重視している。合意形成の過程では、児童が互いの意見の違いに気づき、相手の考えを尊重しながら自分の意見を調整する経験を積むことができる。この経験は、単に話し合いの技法を身につけるだけでなく、他者と協働して課題を解決する力や、学級の一員としての責

任感を育てる基盤となる。さらに、意見の対立を乗り越えて一つの結論を導く過程は、児童にとって学級の一体感や達成感を生み、学級の自治的な活動を支える大きな力となることが示されている。

本実践においても、児童は「後輩に残すもの」をめぐって多様な意見を出し合い、比較・検討しながら合意形成を図る中で、最上級生としての自覚を高め、学級のために主体的に行動しようとする姿が育まれた。これらの姿は、楽しく豊かな学級づくりに向けた学級活動（1）の目指す姿と合致しており、合意形成を重視した話し合い活動の有効性を示すものである。

今後も、児童が主体的に学級づくりに関わるための話し合いの在り方や、合意形成を支える指導の工夫について継続して研究していきたい。特別活動は、児童が他者と協力しながらよりよい生活を創り出す力を育む重要な教育活動である。本研究で得られた知見を基に、これからも特別活動の充実に向けた実践と研究を深めていきたい。

9 成果と今後の課題

- 表形式の板書による共通点や相違点が可視化及びICTを活用した意見の構造化により、児童は自他の意見を客観的に比較しながら、話し合いの方向性を整理し、合意形成につなげることができた。
- 互いの意見の違いを乗り越えて一つの結論を導く過程を通して、学級の協働的な雰囲気を強め、楽しく豊かな学級づくりへの参画意識が高まり、学級全体としてまとまりや達成感の向上、そして最上級生としての自覚も育まれた。
- 本時の授業では、話し合いの終末段階において意見を十分に整理しきれず、結論を導くまでに時間を要する場面が見られた。これは、合意形成に向けて多様な意見が活発に出された一方で、合意形成時の結論を導くまでの時間に課題が残った。多様な意見の集約手順、特に「収束のパターン」をさらに徹底する必要性があった。
- フロア側児童の進行に対する主体性に課題が残った。進行を司会に依存する傾向が強い面があり、みんなで協力して進行する意識に個人差が見られた。司会グループ経験者のフロア児童への声かけを行っていく必要がある。

◎ 主な参考文献

- 杉田 洋 2017 「新学習指導要領の展開 特別活動」
- 文部科学省 2019 「みんなで、よりよい学級学校生活をつくる特別活動 小学校編」
- 文部科学省 2017 「小学校学習指導要領 特別活動編」
- 安部 恭子 2021 「特別活動で学校を楽しくする45のヒント」
- 須永 吉信 2024 「主体的な子ども、自治的なクラスを育む！学級会」
- 文部科学省 2020 「指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料」
- 辻山 和彦 2020 「学級会指導完べきマニュアル」